

まちづくりネットワークえひめ

# 舞 とうん

vol.69



アングル

地域を生きる ..... 前遊子漁協組合長／古谷 和夫 ..... 1

**特集** 『この海で生きる』

海を見つめ思うこと ..... 吉海町／矢野 真弓 ..... 2

「ヒラメの育つ島」で ..... 中島町／高橋 正輝 ..... 4

海と共に生きる ..... 三崎町／阿部 勇二 ..... 6

真珠産地の復活を目指して ..... 津島町／高平 善夫 ..... 8

海中公園の町西海から ..... 西海町／田原 博人 ..... 10

論壇—まちづくり—

瀬戸内海を里海に ..... 九州大学応用力学研究所教授／柳 哲雄 ..... 12

トークナウ

まちづくりの楽しさ、皆にも ..... 西条市／藤田小百合 ..... 14

医師を志す ..... 松山市／伊 玲花 ..... 15

キラリ光るまち

はきものや“ましろ”の一日 ..... 高知県赤岡町／間城 紋江 ..... 16

キラリ光るまちの地芝居グループ ..... 高知県赤岡町／横矢 佐代 ..... 18

研究員レポート

「第19回逆手塾に参加して」 ..... 山下 大成 ..... 19

衝撃の旅・長野 ..... 橋岡 勝一 ..... 20

まちづくり最前線

「ローズ館」奮闘記～企画観光プロジェクト編～ ..... 吉海町／山口真佐美 ..... 22

風おこしのちかい

地方の自立をめざして ..... 久万町／浅井一郎治 ..... 24

MY TOWN うおっちゃんぐ 歩キ目デス&足ラテス

「近代化遺産ウォッチング」 ..... 岡崎 直司 ..... 26

ひろこのちょっといわせて

フロリダレポート～テーマパーク三昧～ ..... 西村 寛子 ..... 28

Information まちセンからのお知らせ

..... 29

特集

「この海で生きる」

愛媛県は、燧灘、伊予灘、宇和海という三つの海域を持ち、全国有数の水産県として、海から恵まれた資源の恩恵を受けています。またえひめの海は、しまなみの多島美、伊予灘の夕日、宇和海の入り江など、さまざまな表情を私たちに見せてくれます。

しかし、これまで私たちは海を汚し続け、海からさまざまな資源を、いや、海そのものを奪いつづけてきました。砂浜がなくなり、魚が減り、海の力が弱くなって、やつとそのおろかさ気が付いたようです。リゾート開発に沸いた時代、魚類・真珠の養殖景気に踊った時代を経て、いま海は、「共生」や「環境」の大切さを教えてくれています。

今号は、そんな海で、地域で生きている方々に登場していただきます。

(編集子 森田)

表紙の言葉

京都も北へ向かうと景色が変わる。北山杉が美しい稜線を飾る。茅葺の家が見え隠れしてくる。四国型より間口が短く、升型で昔話を連想してくれる。

川の流れば澄んでいて、鮎魚が盛んらしい。又、昆虫の宝庫でもある。

周山街道、若狭街道に沿った山村は静かで、自然にすっぽり包まれた格好だ。鞍馬に着く頃はもう夕暮れ。

柳原 あや子



# 地域を生きる

前遊子漁協組合長

古谷 和夫



遊子地区は、宇和島市三浦半島の北側部分にあたる。私たちが、その遊子で漁協を中心に行ってきた営漁活動について述べたい。

## 漁場行使の考え方

海は、ここに生き、住み、働く地域住民のものである。今の漁業者だけでなく、将来、この海に住まう人々のものである。使用に当たっては海を子孫に残せるよう、大切にすることを前提に、「家族労働力を基礎に、都市勤労者並みの所得を得る」規模を標準にして、生け簀や筏の生産手段を業種毎に平等に分配している。その後の生産活動は、自由競争としている。毎年、漁協を柱に、スタートの種苗確保からゴールの生産物販売まで、自由な

スポーツ的な生産活動の競争が行われている。

この家族労働で勤労者並み所得とは、「漁業経営の究極目標は家族の生活充足にある」との基本理念の下に、「足るを知る」生き方の構築を根底に据えている。

## 営業の計画化

経営には、経済的、社会的、自然的な三大リスクがある。経済リスクには、減価償却引当金や貸倒引当金として税務的にフォローされている。社会的リスクも、健康保険・失業保険などとフォローされているが、自然的リスクだけは制度的なフォローは一つない。

対応策としては、経営の健全化と自己資金造成による自己防衛だけである。この健全経営と自己資金備蓄を目指すものが、養殖業者の自主的な営漁計画の樹立である。営漁計画は、一月から十二月を会計年度とし、一月に現状資産と前期費用を参考に計画を樹立する。予測収入の財源としては、期首棚卸財である一年生稚魚や稚貝の販売時を想定して収入予測を立てる。その収入以内で諸経費支出を予算化し営漁計画を樹立する。さらに、諸経費の中に財産的支出として、自己資金造成のための水揚げ高の一割天引貯金を予算す

る。この営漁計画を二十年間余行い、自己資金（定期貯金）の目標額である前期の水揚げ金額を達成（平成六年）した。通常所得率を水揚げ高の三十%としたら、三年分の備蓄が出来たことになる。これは「宮尊徳の「三年の備蓄無きは国に非ず」の理念に通ずる。

## 漁業者の自主活動

「扶け合う協同の理念は、組合員の協同活動等の社会的関係の中でのみ育ち高められる。従って漁協の組合員教育は、生産者組織の協同活動の場を意識的・計画的に実現するところにある。」と考えている。特に自主的な漁業者並びに組織づくりを基本に据えて組合運営をしてきた。自らのことは自らがやる生産者活動は、漁協を柱にして、種苗の確保から生産育成そして販売まで、生産者組織が中心の、仲間うち活動が日常化している。

むすびに、漁業経営は「生活充足」で「足るを知る」生き方であり、相互に扶け合い、自己資金中心の健全な経営を目指す。その自主的な営漁活動の助産婦の役割を負うのが漁協である。僻地の地遊子で、日本一の暖かい地域づくりを目指し努力している。

毎日毎日、海を見ることが出来る幸せ。小さい時から海のそばで育ち、見てきた私には、海はもう、なくてはならないものになっている。一時、故郷を離れ街中で二年間過ごしたこともあるが、やはり、海が見えないとさみしかった。気分も落ち着かなかつた。海は、どんな心を持っていても、全て受けとめてくれる。毎日、違う顔をもっている。うれしい時はさらにきらと輝きを増し、心がいらだつ時は暗く沈み、悲しい時は一緒に嘆き悲しみ、また落ち込んだ時はドドオーと力強く励ましてくれる。一日のはじまり、また終わりに静かな波の音は体も心も癒してくれる。私にとっての海は、そんな存在なのだ。

本物を知  
って欲しい

白砂青松の  
千年松ビー  
チ。ここが私  
の一生涯の棲  
家だ。目前に  
日本三大急潮  
の一つである  
来島海峡の雄  
大な海を望む



民宿千年松 全景



## 海を見つめ思うこと



吉海町 名駒

民宿 千年松 矢野真弓



ことができる。海岸は昔の姿を今もとどめている。この辺一帯は、瀬戸内海国立公園であるため、至る所、自然のままが多い。こういう状態をいつまでも守り続けていきたいと思う。

ここの民宿にとって最も密接な関係のある海。宿の心臓部ともいえるべき、来島うまい魚達。仕入れから、いけすを構えているので、その扱い方など一回一回がいつも新しい状態だ。そんな中で、いかにお客様に満足していただける魚を出すか毎日が勝負である。いつもいい魚だけが集まるかといえば、そうもいかない。年々、魚も減ってきている。その理由はやはり、人間側にあるのだと思う。自分達のわがまま勝手な、自然を壊し、海を汚し、それがどうなることかわかりつつ、目を瞑り、今がある。わがままな思いで、季節に関係なく、食べたくなったらどんなことをしても、あらゆる手段を使っても、手に入れようとする。どこか間違っていないだろうか。海でも陸でも同じだ。くだもの、野菜など全くといっていいくらい季節感がなくなった。何かを食べてもおいしくて感動するものは少ない。昔、幼い頃に、地植えのトマトを育て、実が赤くなり、赤く色づいたら、もいで食べる。味は濃厚で、すごくおいし

## この海で生きる

かった。見かけはいびつでも、それが自然ですごくよかった。今、スーパーで買うトマトは、完熟とはいえ、あの感動するおいしさはどこにもない。逆に、色も形もきれい過ぎて怖い。人間は、本当にこれを追い求めているのだろうか。自然の地魚より、養殖魚を食べることが当たり前になっていく。それを、何も不自然だとも思わない。地魚の価格より、養殖魚の方が値段もよい。みんな、本物を知らない。悲しすぎる。

### 自分のできる範囲で

豊かな漁場の来島海峡。海流の適度な速さと餌の豊富さは、魚の産卵場所に最適だ。一年のうちでも、その時期時期によつて、ここに産卵を求めているのぼつてくる魚たち。しっかりと餌を食べだめし、潮流の適度な速さが、魚の運動にも適している。そんな好条件の中で育った魚は、脂がのり、身がひきしまるのである。どんな所でも、自然のままであれば、その地形にあった魚が集まり、豊かな海であったと思う。人間は、本当に何が大切かをいつのまにか忘れてしまった結果、魚のすみ海まで奪ってしまったのだ。破壊ということは、一瞬のうちになされるが、守ったり、産み出すということは、長い

長い年月をかけ、自分の命をけずることさえある。体全体でそれを実行したものは、喜びを体全体で受けることができる。以前テレビで、植物も育たない砂丘を知恵とたえまぬ努力、何度失敗しても、それを恐れずに立ち向かう勇氣ある行動で、緑の地に変えてしまったのを見て、なんて素晴らしいんだろうと、身震いしたことを覚えていた。「本当はこれなんだ。これが、我々が生きていく上で最も大切なことなんだ。」と実感した。

人は、大自然の前には無力に等しいし、人類だけでは生きていけないのである。全てのものに対して、愛情といたわりの心を忘れてはいけないと、私は自分に言いかせている。こういう思いを持ってくれる人が多ければ、少しは変っていかなくてもできない、思いだけは、身近なものから伝えていきたいと思う。海を、自然を思う気持ちは誰にも負けない。自然いっぱいの中で、過ごせるといふことは、なんて気持ちのいいものだろう。

### 「満天の湯」

今年四月に、海の魅力を最大限に引き込んだ、海水の露天風呂「満天の湯」が完成した。昨年二月に他界した主人の念

願だった。大島の自然いっぱいの中、心も体も溶けこんで、ゆつくりとくつろいでいたきたいという思いだった。やはり、主人も幼い頃から、海で遊び、海を知っていた。海の魅力を皆様に伝えたいという思いは強く、こうして形になった今、ここを訪れる人が、来てよかったと心から思えるような場所になりたいと思っている。こうして、ここで仕事ができる喜び。海に感謝している。



大島石をふんだんに使った海水の露天風呂

まず始めに、「怒和」を紹介しよう。

松山から、高速艇で四十分あまり、位置的には松山の北、広島・山口・愛媛三県の県境に近い温泉郡中島町の中のひとつの島である。

気候は、比較的温暖、風光明媚、人情味のある土地柄である。人口は、約七百人あまり（二〇〇〇年四月現在）、上怒和・元怒和二つの地区からなり、主な産業は、ミカンと漁業、養殖業からなる。

### ミカンづくりの他に

さて、わたしは現在、ミカンと養殖業（ヒラメ・アワビ）で生活を営んでいる。従来、㊤ミカンは、真穴、西宇和青果などに次ぎ、市場では高値で取引されていた。だから、親の代は、ミカンづくりだけでほぼ生活が成り立っていた。しかし、昭和四十七年の暴落につぐ昭和六十年代の価格の低迷により、ミカンづくりの土台が揺らぎ始めたのである。

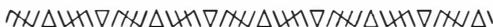
そんな中、私はミカンづくりだけの経営に不安を覚え、まだ両親は健在であるし、三十代半ばであったので、「ほかに何かいい収入源はないだろうか？」と模索していた。その頃、町においてはミカン価格の低迷から新しい産業の掘り起こしを、漁協では経営建て直し対策を、県で



## 「ヒラメの育つ島」で



中島町 上怒和 高橋正輝



は、中子における養殖業の普及を、それぞれ目指していた。

そうした時期に、当時、県の漁業指導士でもあり、上怒和漁協の組合長でもあった田中氏の呼びかけで、漁業同志会会員でもある私をはじめ、有志数名でヒラメ養殖を手掛けたのである。

だが、そこはずぶの素人。漁業権獲得、県、町、他の組合員との折衝、先進地（越智郡上浦町や岡山県玉野市など）の視察、立地条件の調査など、始めるまで試行錯誤の毎日だった。その当時いろいろアドバイスをくださったたり、力を貸してくださった各方面の方には、今この紙面を借りて心の底からお礼が言いたい。「本当にありがとうございます。」と。

### ヒラメ御殿か？

さて、そうして始まったヒラメの養殖だが、果たしてミカンづくりと両立できるのか不安ながらも、育成の管理、エサの一括購入、市場の確保など個々の経営でありながら、コストを抑えるところは抑え、共同でしか出来ないところは、「ヒラメ組」として協力し合い、中島ヒラメとして市場でも高く評価され、着実に成果を出していったのである。一時は、「ヒラメ御殿が、建つのでは？」などと囁か

## この海で生きる



「ヒラメ組」の共同作業

これは養殖業に携る私たちにとって、本当に手痛いものであった。自然の脅威もさることながら、高くなつた護岸の返り波のものが、すぎさ、ごみ問題に始まる環境汚染の問題

等々、さまざまな諸問題も浮上してきたからである。それと、私人としては、平成八年の冬から、徐々にではあるが、アワビの養殖も手がけ、稚貝を増やした年に台風十八号に遭い、全滅を被り、何とも言いがたいショックを受けたのである。とにかく当時は、いかだの修復、行政への援助の働きかけなど、「ヒラメ組」の再起をかけて東奔西走の毎日だった。これにより、「ヒラメ組」としてより一層結束し、これからの課題（労力の軽減、市場の拡大、養殖業者同志のネットワークづくりの強化など）を再検討し、懸命に今もなお養殖を続けている。

それから、地球環境問題が問われ始めて久しい今日、この中島町及び怒和島においてもさまざまな取組みがなされている。その一つに平成七年度に始まった住民運動により、平成八年「愛媛県の海を管理する条例」が制定され、陸月土砂投棄を阻止し（陸月とは中島町の島の一つ）、月一回の水質調査、生ごみのポイ捨ての禁止（ボカシの活用）、廃油石鹸づくり、ゴミ収集方法の改正など、少しずつではあるが、住民の意識改革を推し進めている。このことは私たちだけでなく、地球規模で息長く取り組まねばならないことだろうと思う。

れもした。  
また、平成九年には、第五回美しい日本のむら景観コンテストにおいて、「ヒラメの育つ島」として、わが上怒和でのヒラメの出荷風景の写真が「むらづくり対策推進部長賞」に輝いたりもした。  
けれど、平成三年九月の台風十九号により一回目の打撃をうけ、その後水温の上昇に伴い、病気が発生し、歩留まりも落ちてきた。それに追い討ちをかけるように、市場景気に翳りが見え始め、平成十一年九月の台風十八号による壊滅的な打撃を受けたのである。

### これからの課題

最後に  
これは余談だが、私共夫婦は平成五年十一月七日伊予市の森漁港で開催された「第十三回豊かな海づくり大会」に



ヒラメの生簀と段々畑とみかん山

において稚貝御手渡しに臨席でき、前日の歓迎レセプションもさることながら、当日の感激は今も忘れない。あの感激を胸に、ただ養殖するだけでなく、ミカン農家をはじめ、各々漁業関係者、地域住民との共存共栄の精神の下、自分の目で市場の動向を把握し、ニーズにあった商品を提供していくことが最重要であろうと思う。厳しいけれど、この現状を打破していくしかない。

日本一細長い「佐田岬半島」、その先端に私の住む三崎町があります。北は伊予灘、南は宇和海、西は豊予海峡と三方を海に囲まれたとても風光明媚なところです。平地がほとんど無いため段々畑による農業と、一本釣り、素もぐり、刺し網、ふぐの延縄漁等による漁業とが中心の半農半漁の町です。

先人達によって築き上げられた石積み  
の段々畑で、太陽と海からの照り返しを  
受けて一個ずつていねいに育てられた  
「清見タンゴール」と、昔ながらの一本釣  
りに、意地とこだわりを持った漁師達に  
よって一匹ずつ釣り上げられる「岬あ  
じ・岬さば」は三崎ブランドとして全国  
的に知られるようになりました。

### 「海の男」に憧れて

私は、この三崎で漁業を営む家庭に生  
まれ、素もぐり一筋の父や、他の漁種  
の人たちの生き生きとした姿を見て育ち、  
「海の男」に憧れを持って漁師になりま  
した。もちろん安易な気持ちではなく、漁  
師の厳しさやつらさも覚悟の上でした。  
子どもの頃から慣れ親しんできたこの海  
で、何が何でも生きていくんだと思っ  
ていました。今でもその気持ちは変ること  
はありません。しかしここ数年前から、



## 海と共に生きる



三崎町 串 阿部 勇二

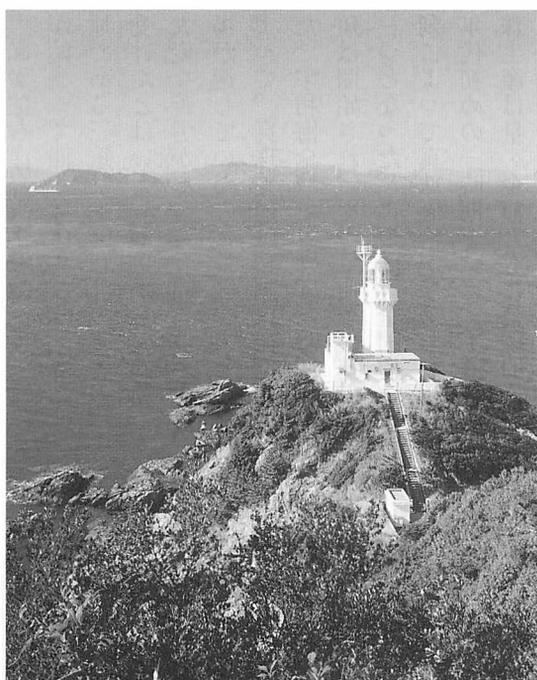
「海で生きること」と「海と生きること」  
の大きな違いを感じています。海と生き  
ることの大切さ、海を守ることの大切さ  
に気付き、海も生きていることを肝に銘  
じて漁業を営まなければならぬと思う  
ようになったのです。

### 三崎漁師の誇り

「資源管理型漁業」——最近よく耳にす  
る言葉です。私たち三崎漁師の先人達は、  
資源管理の大切さに古くから気付いてい  
たように思います。様々な漁法が取り入  
れられる世の中で、多少の機械化はあり  
ますが、昔ながらの一本釣りや素もぐり  
にこだわり続けてきた漁師達の姿がその  
証でしょう。魚や貝、海藻をたくさん採  
れる方法でとれるだけ採ることは、やが  
て資源の減少を招き、海を守ることにな  
らないことは誰にでも分かっていること  
でしょう。少しでも多くの収入を得よう  
とすればするほど目先のことしか見えず、  
先人達の苦労や努力、子や孫の将来が見  
えなくなってしまうがちです。先人達の  
努力があつて今の自分たちが存在し、先  
人達から受け継いだ豊かな海を子孫に受  
け継ぐことが漁師の務めだと思っていま  
す。

私たち三崎漁師はこのことを強く意識

## この海で生きる



し、漁法、漁期、就業時間、漁獲量、漁場において様々な自主規制をしたり、完全休漁日や漁種別休漁日を設けています。「自分さえよければ、自分の代さえよければ・・・」という考えではなく、三崎漁師の自信と誇り、そして何より「海との共存意識」がなければ出来ないと思います。とかく正直者がバカを見るといわれがちな時代に、ずっと先を見つめて真正直に生きたいと思うのです。

### 先人から継いだ海を子供たちに

私が漁師になって二十年余り、この間のゴミによる漁場の荒廃は深刻です。子

供の頃「流れ藻」を見ては「ゴミだ。ゴミだ。」と聞いていました。流れ藻は稚魚のゆりかごで、豊かな海には無くてもならないものです。子供の頃に海に浮かぶゴミらしきものといえば「流れ藻」くらいだったのです。しかし近年の海の浮遊物はどうでしょう。ペットボトル、ナイロン袋、様々なプラスチック製品、時には冷蔵庫や洗濯機まであります。この現状に危機感を持ち、私たち三崎漁師は「海は恋人運動」をはじめました。海の恩恵を受けている私たち自身がゴミを捨てないことはもちろん、様々な啓発運動、若者による定期的な海岸清掃、七月二十

日の海の日には、全組合員とその家族が地元小中学生と一緒に海清掃を行っています。

運動をはじめて七年、海に浮かぶゴミはなかなか減りません。全国の海の中でも屈指の潮の流れの速い私たちの漁場で、私たちの運動が目に見える結果として現れにくいことは分かっています。しかしこの運動を通じて、漁業者が海に対する気持ちを強くしたこと、

この運動は特別なことではなく、海と共に生きる漁業者の当たり前行為であると気付いたことは間違いありません。

漁師は知っています。浮遊するゴミの下に稚魚がいないこと、稚魚は流れ藻の下で育つことを。素もぐりの海士は知っています。どんなによい岩陰でも、沈んだ空き缶や空き瓶の近くにアワビやサザエがないこと、アワビやサザエは海藻をそつとはぐればいることを。

ある親子三代、男三人での会話です。  
祖父「昔はこの海でも海亀がおつてのう、亀は長生きの代表やし、海の神様やと思うちよつて亀を見たらお神酒を海に流しよつた。」

父「最近、亀がゴミのナイロンを好物のくらげと間違えて食べてしもて死んでしまふことがよくあるがと。ゴミを海に捨てたらいけないのう。」  
子「海のゴミが無くなつたら、僕が大人になって漁師になる頃は、亀が増えるやろうか。」

この海で、この海と生きようとする立派な漁業後継者の誕生です。

漁師としてこの海で生きることが、先人から受け継いだ豊かな海を豊かな海のまま、子や孫に引き継ぐこと、海と共に生きることだと信じています。

私が住む津島町下灘地区で、真珠養殖が始まって四十数年になる。当初は先進地である三重県や御荘町の業者の指導を受けたとはいえ、ゼロからの出発であり大変な苦労があったと聞く。その後、漁場が適していたのと地区の人々の努力によって、真珠養殖は順調に発展していった。宇和海全域でもほぼ同時期に真珠養殖は開始され、やがて南予の基幹産業の一つとなった。この間、全国的な生産過剰によって真珠価格が暴落した昭和四十年代初めの一時期を除き、下灘地区の真珠生産は量・金額ともに飛躍的に増大した。

## 大量死

しかし、真珠貝の大量死が起きてから状況は一変した。この大量死は程度の差こそあれ四年続き、真珠業者の経営を直撃したのである。昨年はようやくおさまったものの、下灘地区全体では廃・休業者の増加による生産量の減少、不況による真珠価格の下落もあって、生産額は最盛期の十〜二十パーセントでしかない。まだまだ産地復活には程遠いのである。

私は今から二十年近く前、大学卒業と同時にこの仕事に就いた。最初の十年余りは気楽なものだった。父がやってきた



# 真珠産地の復活を 目指して



津島町 柿ノ浦 高平善夫

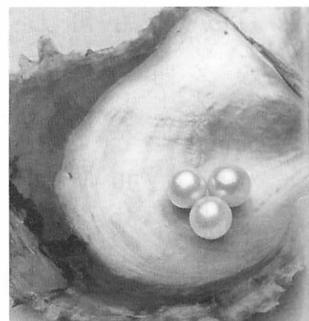
とおりのことをやって「越物」と呼ばれる二年間養殖する真珠を作り、それがいい値で売れた。儲かるから生産量も増やした。下灘湾が真珠筏で一杯になった。単価の高い大粒真珠を作って大成功した人もある。ちょうどバブルの頃、真珠生産額も頂点に達したが、その一方、真珠貝の死亡率は少しずつ高くなり、貝の巻きは少しずつ薄くなっていた。誰もがこんな状況がいつまでも続くわけがない、今のうちに何とかしなければならぬと思っていた。

そして、平成八年秋、大量死は起こった。真珠産業の危機がこういう形で、こつとも突然起こるとは誰も考えていなかっただけに、皆途方にくれた。それから四年、下灘地区では年によって程度の差こそあれ大量死は続き、この間、廃業者・休業者が相次ぎ、生産高が激減したのは前述したとおりである。それでも大半の人達は、高水温に強いとされる中国系の貝を導入しつつコストの削減をはかり、細々とこの仕事を続けてきた。そして平成十二年、大量死は起こらずようやく微かな希望が見えてきたところである。

## したたかな考え方

真珠生産地復活にはこれからが正念場

## この海で生きる



である。大量死はまたいつ起こるかかわからない。淡水真珠や、白蝶、黒蝶真珠等の強力な外

国産のライバルも出現した。不況による真珠製品の販売不振も深刻である。資金の問題も大きい。しかし、悲観ばかりしていても始まらない。かつて真珠養殖の祖、御木本幸吉翁は「世界中の女性の首に、真珠のネックレスを巻きつきたい。」と語ったらしいが、そう考えれば市場は無限である。良いものを地道に作っていけば、日本のアコヤ真珠が外国産真珠に負けることはあるまい。中国系アコヤ貝の使い方等の技術的な点に関しては、真珠養殖業界は情報交換が盛んで非常にオープンなので、それほど心配はいるまい。大量死の原因とその対策については、これまでには様々なことが言われてきたが、私の素人考えではどれか一つに特定することには無理があるように思う。我々真珠養殖業者としては、これ以上、海に負担をかけることをやめ、個々の労働力に応じた手堅い経営をし、それでも大量死

が起きた場合は「自然が相手なのだからこういう年もある。」と開き直るくらいのもので、したたかで長期的な考え方をすることが必要ではあるまいか。

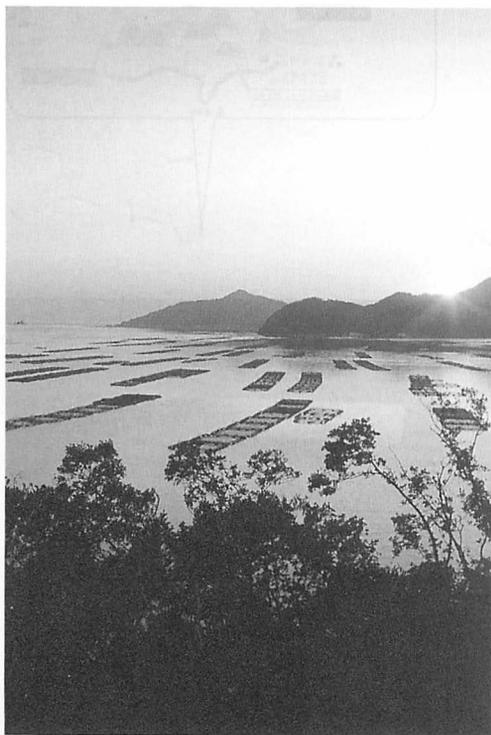
### 反省を忘れず、次世代に

我々は海で生きる漁民でありながら、これまで涙を埋めて、欲に任せて増産し、優良母貝を作ると称して、自然界では考えられない時期に稚貝を孵化させてきた。綺麗な真珠は海と母貝が作ってくれという基本を忘れて、人間が作ると思いついていたのである。真珠産地の復活をはかり、さらには将来にわたってこの産点を反省すること

から出発する必要があると思う。

生活が便利で快適になった分、生活廃水等で海は汚れ、特定の生物を特定の区画で大量に飼育するという海面養殖業は、環境に対して大きな負荷を加えてきたであろうから、下

灘の海が二十年、三十年前の状態に戻ることはないかもしれない。しかし大量死を機に、我々の考えも儲けるといふことから、何とかこの仕事で生活していききたいという控えめなものに変ってきた。海を守らなければならぬという意識も強くなった。この仕事が好きで、綺麗な真珠を作りたいという意欲は旺盛である。このまま粘り強く努力を重ねていけば、近い将来、下灘地区は真珠産地として復活すると信じていたい。四十数年前、段々畑で芋や麦を作ったり、網で漁をしていた父の世代が、苦勞の末始めたこの仕事を、次の世代に残すのが我々の務めである。



湾内に浮かぶ真珠筏

「海中公園の町」といえば「しゅうみ」色とりどりのサンゴ、カラフルな熱帯魚の遊泳する様はまさに「海のお花畑」。

愛媛県の最南端に位置し、県都松山市から車で約三時間。平坦地が少なく、高い山が連なり、海岸へと急斜面が続く、豊後水道に突き出た人口約三千四百人の小さな町「西海町」。海岸線は南予特有のリアス式海岸となっており、入江は天然の良港となり、好漁場にも恵まれ、古くからイワシまき網の漁業基地として栄えていました。しかし、昭和三十一年に、未曾有の大不漁に襲われ、町の経済は大打撃を受けることになりました。それを機に、「捕る漁業」から「作り育てる漁業」へと転換が図られ、現在では、タイ、ハマチなどの養殖いけすが浮かぶ全国有数の養殖漁業基地となっています。

### 鹿島・グラスボート

町が、海をつかった観光を施策の柱としたのは、昭和三十年のことです。（西海町誌）その当時は、「鹿島」を中心としたものでした。現在のような海中遊覧は、昭和四十年に始まりました。土佐清水市からグラスボートを借受けたのがきっかけとなり、昭和四十一年には町営でグラスボート「第一あおぎり」を建造したの



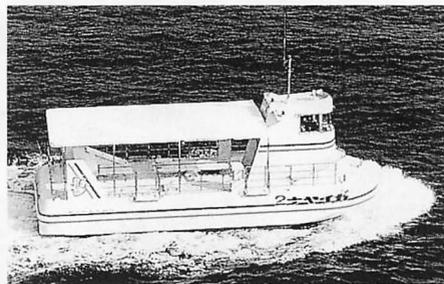
# 海中公園の町 西海から

西海町 産業建設課

課長補佐 田原 博人



を皮切りに、第二、第三、第五あおぎり  
と順次建造。当時、観光客は増加の一途  
をたどり、宇和島から観光客を満載した  
大型船が鹿島へと連絡船を出すほどでし  
た。シーズン中ともなると、鹿島は海水  
浴・海中遊覧と大勢の人で賑わっていま  
した。この間、昭和四十五年に日本で第  
一号の海中公園の指定を受け、また、昭  
和四十七年には「足摺宇和海国立公園」  
昇格と観光客はますます増加し、昭和四  
十九年には、過去最高の十六万人の出入  
をみるまでに至りました。しかし、これ  
をピークに、昭和五十年のオイルショッ  
クの影響をもろに受け、その後の観光客  
数は激減。昭和六十年代まで三・五〜五  
万人で推移していました。



◀海中展望船「ガイヤナ」



▶「ユメカイナ」の船中

## 新造船

この間の累積赤字も膨大なものとなり、観光事業を存続させるか、廃業とするかの議論が湧き上がります。町の柱である施策も風前の灯火。が、期はおりしも竹下内閣の「ふるさと創世一億円」。その資金を充当し、町観光事業の存続をかけることになりました。平成四年、従来の船底にガラスを張ったグラスボートから、客室が水面下にあり、座ったまま海中のサンゴが観賞できる水中展望船ガイヤナ（船名は全国公募）を導入。この年は新船効果もありシーズン中には、二時間待ちの状態が続きました。そこで翌年には二隻目を、また、平成八年にも世界初の双胴船型高速水中展望船ユメカイナ（運航



中は展望室が海面上にあり、海中公園に入ると油圧で展望室を水中におろす。）を就航させました。しかしその年は、前年の三・七万人を一人人程上回りましたが、新船効果も二年と続かず、就航年だけの増加に止まりました。それ以降は、また大幅な観光客の減少を見えています。

### これから…癒しの町へ

現在の観光入込客数は、ピーク時の約八分の一、二万人を割るところまできており、なすすべがないのが現状です。観光事業で町おこしと言える状態ではありません。そんな中でも、なんとか活路を見出そうと、懸案されていた冬場の水中展望船の波浪欠航を回避するため、浪の穏やかな内湾での新航路を開設しました。既存の航路よりやや見劣りはするものの、既存航路欠航時の代替航路として、約百%の運航率を誇り、訪れる観光客には大変好評を得ています。また、近年のしなみ海道の開通、高速道路の南予への延伸と、町へのアクセスとしての道路交通網は着々整備されており、まだ今のところ開通、延伸効果は入込客数として反映してはいませんが、高速化は広域連携を図るうえで、大いに期待しています。

近年、海中公園観光客数では減少しているものの、自然とのふれあいを求め、「鹿島園地」を訪れる公園利用者は、僅かですが上昇傾向にあります。「鹿島」は公園事業で各種の整備が進められており、キャンプ場、休憩所、シャワー棟などがリニューアルされ、生まれ変わっています。気象条件に左右される事が多いのですが、今年の夏は鹿島でのイベントを沢山用意しています。例えば、サンゴや熱帯魚が楽しめる「コーラルビーチ」でのシュノーケル教室。みなさん、餌付けで、手のひらに「海のお花畑」を作って見ませんか。

晴れた日には遠く九州が一望でき、十一月には野路菊が咲き乱れる「高茂岬」、潮害や季節風から家を守るために作られた、石垣が軒に達するほどの高さまである「石垣の里」等、癒し系の町、西海町には、まだまだ豊かな自然が多くあり、豊かな人たちがたくさん暮らしています。みなさんに訪れていただき、ふれあい、感じていただければと思っています。今年の夏はぜひ西海町へ。ああ、梅雨明けが待ち遠しい。

最後に、自然美と先人達が残してくれた知恵の結晶を、後世に残すことを誓っています。

# 瀬戸内海を里海に

九州大学応用力学研究所 力学シュミレーション研究センター

教授 柳 哲雄



20世紀後半、経済効率偏重の価値観に基づく人々の諸活動が自然環境中に様々な矛盾を生み、その解決のために21世紀は「環境の時代」、「人と自然の共生の時代」になると言われている。

私たちが瀬戸内海と共生するとは、人が海とどのように関わることを指すのだろうか？それは私たちが瀬戸内海を「里海（さとこうみ）」化すること、だと私は思う。

人は陸上で生活しているから、海のこととよく知らない。よく知らないままに、泳いだり、魚を獲ったり、船で人や荷物を運んだり、排水を流したり、埋め立てたり、海底の砂を取ったり、とにかく、人の役に立つように海を利用してきた。ところが、このような諸活動の結果、海が汚れて泳げなくなったり、赤潮が発生して魚が死んだり、海底の砂がなくなったり、イカナゴがいなくなったり、いろいろな不都合が起こってきた。これらはすべて人が海の特性をよく理解しないで、勝手に利用してきた結果である。現在政治問題化している有明海のノリ問題の本質も同様で、有明海の特性をよく理解しないままの様々な利用の仕方が矛盾をきたしてきた結果である。

それでは人は海とどのように付き合い合えば良いのだろうか？人は海との付き合い方

に関しては経験が浅いが、山との付き合い方に関しては長い経験を有している。人と山の付き合い方から、人と海の付き合い方のヒントを得ることは可能である。

人は山と三種類の付き合い方をしてきた。ひとつはスギやヒノキなど高価な建材を植林した針葉樹林である。これと対極にあるのが、クスやツバキなど西日本の潜在植生を保存し、人は一切利用できない、鎮守の森に見られる常緑広葉樹林である。どちらにも人にとって必要ではあるが、生物多様性という視点から見た場合、針葉樹林も常緑広葉樹林も人以外の種々の生物にとって快適な空間ではない。針葉樹林は実がならず、地表に花咲く植物も育たないため、動物は棲めない。同様に鎮守の森も生態系は豊かではない。

人が利用可能で、生態系も豊かな山は里山である。里山では約三十年毎に伐採可能なクヌギやナラなどの落葉広葉樹が植ええられる。落葉広葉樹は樹脂を出すため、カブトムシなどの昆虫が集まるほか、ドングリを求めて小動物も集まる。さらに秋季から春季の落葉期には地面まで陽が届き、様々な植物が育ち開花し、蜜を求めて蝶なども飛んでくる。

瀬戸内海で、針葉樹林に相当する付き合い方は養殖場であり、鎮守の森は禁漁



おだやかな瀬戸内海の表情（大島より来島海峡を臨む）

区や禁漁期に対応する。どちらも瀬戸内海にとつては重要な空間である。そして里山に対応する付き合い方は栽培漁業であろう。

現在の栽培漁業は稚仔魚の生産にのみ重点が置かれ、魚を放流したら終わりということになっているが、本来の栽培漁業では放流後の魚が自然魚とどのように関わり、最終的な漁獲にまでどうつながるかを、きちんと把握しておかなければならない。そのような知識のもとで、初めて、どのような種類の魚をいつ、どれほど、どのように放流すれば、人にとつても、海洋生態系にとつても、その海域が最も相応しい場となるかが明らかになる。しかし、現在私たちはそのような知識を持ち合わせていないので、里山に対応するような海との付き合い方をすることが出来ない。

もし将来、海に関するいろいろなことが明らかになり、里山に対応するような海との付き合い方が実現したら、私たちはそのような海を「里海・さとうみ」と呼んでもよいだろう。

山に針葉樹林、鎮守の森、里山があるように、正確な知識・情報に基づいた沿岸漁民・住民・科学者・行政の議論のもとに、瀬戸内海に養殖場、禁漁区、栽培

漁業海域を適切に配置することが必要である。もちろん、同時に水産業とは直接関係しない、港湾区域やマリーンレジャの海域指定も必要であろう。

養殖場では自家汚染を起さない範囲の養殖尾数、投餌量を守り、禁漁期間・禁漁区を厳守し、放流した稚仔魚を保護するために、藻場や干潟などの多様な海域空間を保全し、商品価値のない稚仔魚の混獲を防ぐために、網目の大きさはきびしく守らなければならない。

このような漁業者の努力の他、瀬戸内海を基本的には魚が成育する場として保全するためには、海砂をとらない、ゴミを捨てない、浅瀬や干潟を埋め立てない、多量の窒素やリンを負荷しない、など様々な瀬戸内海環境保全施策が必要である。

こうして私たちが瀬戸内海を里海化出来たなら、それは人と海の付き合い方に悩んでいる全世界の人々への貴重なメッセージとなることは確実である。

はじめまして。私は西条生まれの西条育ちですが、高校卒業後は、しばらくふるさと西条を離れていました。若い時は田舎がいやで何となく都会に憧れ、そこには何かいいことがあるような気がして都会に行ってしまう人が多いのではないのでしょうか。私も例にもれず、そうでした。でも、今はいなかのこの西条というまちが好きで、このまちにずっと暮らしたいと心から思っています。そんな気持ちにさせてくれたのが青年会議所なの

は受身でした。自分から何かをするという考えはなく、田舎はつまらない、都会へ行ったら誰かが楽しくさせてくれるのでは、などと勝手に思いこんでいました。確かに親元から開放された自由、遊びということでは、それなりに楽しいこともありました。しかし、若いときの受身で味わう楽しさよりも、今の自分で考え自分で何かを創造していく方が、数倍楽しいと感じます。

ひとつの想いに向かって、仲間と語

## まぢぐりの楽じゃ、皆にせ

(社)西条青年会議所

理事長 藤田小百合



です。

今、西条青年会議所の理事長としてこのまちを活気ある魅力的なまちにするにはどうしたらいいか、考えています。「このまちに必要なものはなにか、そして自分たちに出来ることは何か」ということを活動の基本においております。まぢぐりは自分たちで考え自分たちでする、そして、それはとても楽しいことなのです。

振り返ってみると、高校生の頃の私

り、人と出会い、人が動く…みんなで気持ちをもひとつにして、想いを実現したときの歓びと感動。途中、激しい議論やすれ違いなど苦しいこともあります。それもひとつのドラマ、想い出となりま

す。また、まぢぐりは人との出会いの連続です。人と出会うたびに新しいことに気づき、新しい自分を発見します。

六年前、西条青年会議所では小学生の子どもたちとともに「ふるさと探検隊」という事業を行いました。「ふるさ

と西条再発見」をテーマに年に数回、八十余名の子どもたちが集まって、いっしょに海・山・川を探検しました。その時のことですが、私は最後の閉校式の時に子供たちの前で挨拶をさせていただく機会をいただきました。話をはじめてしばらくして、目の前の女の子が涙を浮かべているのに気づきました。彼女が体験したことのある想いがこみ上げてきたのでしよう。思わず私も耐え切れなくて言葉に詰まったという思い出があります。感動でした。

その子供たちも今はりっぱな高校生になっていることでしょう。今年はその子供たちに再び帰ってきてもらって、今度はともにまぢぐりを考えていきたいと思っています。また、もし、その子たちが自分の進む道、将来について悩んでいたら、いっしょに考えたいと思っています。地域で活動する私たちは、子どもたちの親や学校の先生たちとはまた違ったお話もできることと思います。このまち西条の大自然とふれあいながら、まちの未来を担う人材(材)づくりのお役にたてれば、と考えています。

21世紀は地方の時代、自分たちのまぢは自分たちで創るもの。ひとりでも多くの人にまぢぐりの楽しさを知ってほしい、そう思います。

医者を目指す人たちは、それぞれに色々な思いを抱え、その道を選ぶことになったのだろう。よく聞く話には、親しい人との死別体験をきっかけに医療の道を考えるようになったというものだ。私もそのケースである。両親は医療とは関係ない、自営業を営んでいた。将来の職業だけでなく、私のすべてに大きな影響をもたらした出来事があった。それは阪神大震災。十五歳の冬だった。この日私は、大好きな母を失った。母との別れは、

## 医師を志す

愛媛大学医学部

三年生  
尹 玲花



るばかりだったのだ。一年が経ち、二年が経ちと時が過ぎるにつれて、心の傷が頭をもたげ、私たちを苦しめ始める。失われたものの大きさに改めて傷つき、暗い穴からなかなかはい上がれない。大学生になって、「あしなが育英会」という、事故や病気、災害、自殺などで親を失った子供たちを支援する民間団体の奨学生となった。ここでは、親との死別体験を共有する多くの学生たちと出会った。それぞれに住む場所も境遇も様々

ら電話があった。八十九歳になるその人は、私に関する記事を新聞で見ても、ご自身も幼い頃に地震でお母様を亡くされた経験があり、私の事を他人とは思えないと言って、私を探していらつしやうたと言う。私は、何ともいえない気持ちになり、電話口で泣いてしまった。その後、おばあさんはお孫さんと一緒に私に会いに来てくださり、ゆっくりお話をすることができた。こんな出会いに、私は癒されていくんだと実感した。

これからも、私の人生はまだまだ「地震」を中心としてまわり続けていくかもしれない。私はあの災難に少しづつ自分なりに意味付けをしながら成長していったらと思っている。

あまりにも突然で、悲惨なものだった。友達やかわいがってくれた近所の方など私の周りから本当に多くの命が一瞬にして奪われてしまった。命のはかなさを見せつけられて、単純に命を守りたいと思った。これが、私の医療の道を選んだきっかけだった。

地震によって、私自身も深く傷ついた。家族を失ったばかりか、自宅は家事で焼かれ途方にくれた。壊滅した街では悲しむ暇もなく、皆生活の再建に追われ

だが、一つの悲しみを共に乗り越えたいと強く願う仲間だ。募金活動や遺児たちの心のケアプログラム等に取り組み、自分の、そして仲間の癒しを考えるのだ。私は「あしなが」の活動を通して、心の問題に非常に興味を持った。自分自身、心の傷をもてあまし苦しんでいるからこそ、医師となり、同じように心の問題に苦しむ人たちに何かできる事があるように思える。

ある日家に、知らないおばあさんか



# キラリ たるとす

## 高知県 赤岡町

えひめのみなさんこんにちわ。  
実は私の体の中には愛媛の血が流れているのであります。

母が城辺の生まれで高知と愛媛のハイフなので、まだお会いしてない皆様のこと、単純な私、ひとり身近に感じているのでございます。

それはさておき、まちづくりの話  
をこのページではとても足りなく、  
そこを考えましたのが、私の店、  
はきものや、まじるの一日です。  
それでは はじまりはじまり...



**朝** 高校生からいただいた  
ルーズソックスの中に手を入  
れ、靴を磨き、ついでに  
床を拭く。私たちはいつか、  
リサイクルショップ赤岡ランドの店を  
したい夢がある。赤岡に  
は、杉村という、廃品  
を集めている会社がある。  
私の店でも今、靴に混じ



って、ネクタイとブラウスを売っている。  
そして商店街のみなは、古いタンヌヤ  
ツボなど骨董品を集めている。どこそこ  
にこんなものがごろがっている。電話が  
あると、トラックをもっている水道屋の  
じゅんこちゃんも運転を拾うに行く。

**商** 店街の小さい道路はゆるやかな坂道、おまけに  
毎朝、お遍路さん  
が通る。店の前の  
道に拾ったテーブルと  
椅子を並べて、コーヒ  
ーをどうぞ、ここで一  
休みませんか？のサービスをする。その  
時一緒にコーヒーを飲みながら赤岡の歴  
史や、ローソクの灯りで絵を覗く七月に  
ある絵金祭りのお話をしたり、お遍路さん  
から、お知恵を拝借する。



すべな夕帳にメモリ、お  
もしろい話は、みんなに  
知らせる。その時欠かさ  
ず、斜めのさつちゃん  
の店の手ぬぐいぼうしの  
ことや隣の店の絹の足袋の商品もちらつ  
と宣伝する。自分の草履や下駄の宣伝は、  
おこがましいので見える所において、ち  
らつかせる。ついでに赤岡町のパンフレ  
ットをお土産に渡す。お気を付けてと言  
って手を振った。



**あ** あ、コーヒの匂いをかぎつけて

毎朝やってくるのがお客様数名と近所の  
おばちゃん達。そこでああでもないこ  
でもない、みんなは、横町のお話をし  
ている。まじるもつを持ってくる人  
トマトを持ってくる人。テーブル  
の上はいつも食べ物で盛り。  
ついでに絵金祭り、あなたどうする会議  
をおばちゃん達はしている。



**次** にやって来たのがコンニャク屋の佐  
代ちゃん。大きな声で「みてみて、この  
手相やっぱり夢はかなう  
で。」手相も芝居小屋が立  
つ線がくっきりと伸びてき  
た。「役場の謙介さんにも  
そのことを電話して知らせ  
るかえ、さあ、仕事はやき、怒られるで、  
けんど電話せんといかんねえ。けんど出  
来たら出来たで大変で、五年後かえ。」  
二人はキラッと目が光って、ウフフと笑  
って、コンニャク配達に行った。佐代ち  
ゃんは今夜も歌舞伎の練習に付き合う。



**私** は、皆の話を聞いていたら仕事にな  
らないので店の片スミに置いてあるミシ  
ンの前に座り、隣の町からいただいた十  
九代目木村庄之介さんのほりで袋や鼻  
緒を作ることにした。この夏、絵金まつ  
りの日に売る。六月にはインターネット  
で限定販売をします。ウフフ。

**お** 屋ごう、見かけない男の



ひとが一人やってきて、「赤  
岡パワーアップふんどし下さ  
い」男のれんふんどしも  
絵金ふんどし  
しも計七枚  
買って、名  
も名乗らずにパンフレットを、  
一時間ほど目撃、帰って行った。  
ちらっと聞いたら、高松  
の人だった。おみやげに  
路地の風のうちわとどつ  
ぽがえしのおまもりをあげた。  
このふんどしで、こじやんと  
お世話になったのがワークシ  
ョップのメンバーのデザイナー  
梅原真さん。この人がいな  
かったらふんどしはな  
かった。だって、「お  
まえふんどし作れよ」  
と私に数年前、どらめ  
祭りの日に言った。



# 赤岡、小さい町に目番

そうしてたら次にや  
って来たのが、佐代ち  
やんとこのおばあちゃん、八十三才、歌  
舞伎を数年前やろうと、いいだしっぺ。  
今も一番の現役。ばあちゃん、何を言  
にきたのかと申しますと、この間にやっ  
たお喜楽えんげい場の話し。「おまん、  
コンサートは最高やったなえー」そうです、  
私達は若竹まちづくり研究所の畠中洋行  
さんからの電話で「今回、この蔵を借り  
てすることで、みんなの夢の絵金収納庫  
を作るきっかけになったらいいき、ここ  
でしよう！」と、声をかけて下さった。  
みんなのでっかいマスクをし、大掃除。  
蔵をススキな「コンサートのスアー」にした。  
今度この話しはゆっくり話します。酒屋  
さんの美枝さんはこの蔵をこんな風にし  
たいと粘土の家を作った。お喜楽は町の  
人達だけで始め、楽しんでいた  
のに、ドンドン人は増え内容的  
にも充実してきました。何故か  
人がよってくる。



5月6日  
第六回 お喜楽演芸場



となりの町、夜須町の塩井さん、  
甚平姿に真っ黒い顔して、私に  
真面目顔で、「町づくりして何が残った？」  
って聞いてきた。私は、  
「えー。そんなー何が残ったかって？」  
「これからの自分の生き方よ。」そして、  
「この町が自分の庭だから、ボチボチ散  
歩かえ。えひめの歩キ目アスよね。」と  
答えた。  
「あなたはどうなが？」と聞きたかった  
のに、忙しくて今度電話で聞こうと思っ  
たの巻。



もしもし、二時過ぎに若竹まち  
づくりのメンバー中越さんから電話。  
「六月に町の靴磨きに行かん？」私その  
横でいつものように似顔絵描き、つい  
で二人は自分を磨くのだ。その後、郵  
便屋さんに渡されたのが、千葉工科大学  
の先生私達のワークショップのメンバー  
延藤安弘さんからの小包。中を開けると、  
本が四冊と手紙がしたためてあった。不  
良息子は地域の人に育ててもらいなさいと。  
その通り数日前から、ある会社に息子が  
育ててもらっているのをごいいます。



次  
にやって来たのが、ふとん  
屋のマーちゃん。商工会の局長で  
もある。昔、大根笛を吹いて、私  
をたまげらしたことがある。また  
また今回は鼻笛。この間のお喜楽



のハワイのカウアイ島のホロホロ・ネル  
ソさんのバクリだとほすく分かったけれど、  
穴を開けるのがすきなのかと思つた。絵  
金祭りにこれ売って、サイフをふくら  
ませたいとのこと。店の中はマーちゃん  
のビィヒヤラ、ビィヒヤラ、ふくらませ。  
赤岡のゆるやかな坂道を、浜で焼  
けた光った顔して自  
転車で魚を売るおば  
ちゃん。  
おっかない顔したす  
えもりのレトロなサ  
ンパツ屋のおんちゃん。  
修理ならおまかせ、リズムでミシ  
ンの松井のおんちゃん。  
絵金グッズでがんばる今井明美さ  
ん。  
ホメ残して貸して下さった旭湯の  
おんちゃんやおばさんの見守る目。  
そしてその旭湯の中でワークショ  
ップのメンバーでもある畠中智子  
さんのおんなをまとめる声。  
えんの下の力持ちの島  
崎さんや入交さん、で  
かい声して、勇気づけ  
てくれる教育長。



この町に住みたいとい  
いっづけるとなり町の  
大学生のやすちゃん、  
赤岡の町並の写真を撮  
り続けている。



赤岡のみんなは全員が自然  
に自分の役目を感じて生き  
ています。  
それは誰から言われること  
もなく、子ども達も含めて。  
この数年間ワークショップ  
で学んだことや、知らされ  
たことを胸に、自分達に出  
来ることを、日々の生活の  
中で少しづつ、作っていこ  
うと、あんもくの約束。  
でかいことはみんなのでやっ  
て...  
そして佐代さんの手相のよ  
うに夢は叶う線がどこまで  
ものびることを信じて、赤  
岡のみんなは、風の人の力  
を借りて今日も、ちくたく  
ちくたくポーンポーンと、  
暮らすのでございます。  
路地からの吹いてくる風に  
のって...  
おしまい。おしまい。

魚がうまい。海が見える全国で二

きらり光るまちの地芝居グループ

—土佐絵金歌舞伎伝承会—

赤岡町 横矢 佐代



はりまや橋から東へ十六

km。海沿いにある日本で二番目に小さな町赤岡町。—浜の宴にや後先いらぬ。どろめ肴に太平洋を一気飲み。—でおなじみの「どろめまつり」は有名です。

そんな赤岡町には、幕末の絵師、弘瀬金蔵こと通称「絵金」の残した屏風芝居絵が数点あります。毎年、七月の第3土・日の絵金まつりの夕刻になると、商店街の軒下にて、その屏風芝居絵は並べられます。そして、ろうそくの炎の中に浮かび上がり、鮮やかな彩を放ち、生々しさと躍動感に満ち、美しくそして妖しく夢幻の世界を繰り広げてくれ

ます。

土佐絵金歌舞伎伝承会は、その屏風絵に魅せられて、屏風に描かれていた芝居を実際に自分たちで演じてみようという前に結成された会です。結成までに三年。「町の補助金待っていたらいつになるかわからない。とにかく自分達の手でやれるところまでやってみよう。」と走り出したら止まらない。

脅威の素人集団。でも、他の農村歌舞伎と違いゼロからの出発の伝承会は、衣装、かつら、大道具と資金面では苦労もあります。でも、一年一年、回を重ねるごとに一つずつ増えていく演目と、手づくりの衣装に大道具。この九年間、役者も板についてきまし

たが、歌舞伎座の舞台よりもりっぱとお褒めの言葉もいただける手づくりの大道具に成長しました。

一昨年には、フランスのリヨンで開催されたジャパンウィークにも参加し、絵金歌舞伎を通して、世界に絵金の町赤岡町をPRすることが出来ました。

まだまだ未熟な伝承会ですが、少しずつ成長し、赤岡町に絵金の屏風絵がある限り絵金の町赤岡を盛り上げていこうと頑張っています。絵金まつりの夜「弁天座（昔の芝居小屋）」の跡地に作られた特設舞台。手づくりの素人歌舞伎だけど意気込みと気合は天下一品。

ぜひ、一度、ご覧になってください。



毎年7月の第3土・日に絵金まつりにあわせ行われる。



絵金の屏風絵

※今年は7月14・15日に開催されます。

## 研究員レポート

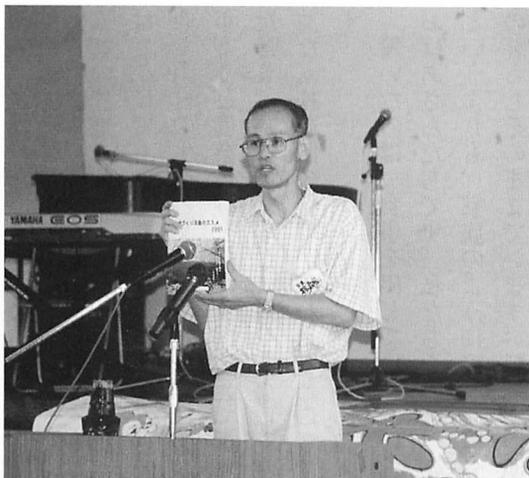
# 「第19回逆手塾に参加して」

主任研究員 山下 大成

六月九日、私自身初めての逆手塾に参加するため、当センターの三名、前主任研究員の藤田さんとともに総領町に入る。冒頭、オープニングの音楽と前会長である中田正俊氏のテンションの高い司会進行に度肝を抜かれたが、気がつけばリレー講演が始まり、最初は、香川県議会議員石井亨氏による豊島の産業廃棄物事件の報告。行政に身を置く人間としては、かなりショッキングな内容につけから引き込まれる。続いて、いのちの応援舎代表山本文子氏から、「性教育はいのちの話」という迫力ある語り口に、大人としての責任を痛感。その後、熊本県水俣

市の愛林館館長沢畑亨氏からは、「持続可能なむらづくり」のためのさまざまな試みと「地域自給のすすめ」について非常に興味深い報告等があり、最後に、熊本大学教授徳野貞雄氏から、「地域社会は、市町村合併問題に浮き足立つことなく、行政組織とは別の自前の自治組織をつくらう」との提言がなされた。

分科会は、論客ぞろいの講師陣に目撃りしたが、やはり逆手流の家元和田芳治氏のところへ。三角技法や、マンガラ法を用いたネーミングやキャッチフレーズづくりに取り組んだ。和田氏は「社会教育こそ自分の天職」だと本に書いておられるが、氏はまさに教育者であり、逆手



カソカ家元の和田氏から当センターの発刊物をPRしていただく

塾の特徴である音楽やノリのよさは、レクリエーション活動に端を発しているのだと納得した次第。「哲学だけでなく、手法を持ち帰って欲しい」という言葉が印象に残った。

翌日、徳野先生による過激なまとめでは、「物事は、必ずプラス(正)とマイナス(逆) 両方の視点から見えておく必要がある」として、性の問題やまちづくりなど今回の主要なテーマを題材に総括的な説明があった。

今回の催しは、「過疎を逆手にとる会」から「逆手塾」に名称を変更して、再び原点に立ち返ったの開催ということであったが、さすがにゲストや参加者の方々のレベルは高く、自分にとっても意義深いものとなった。特に、そこで出会った人たちは、皆、言語感覚がシャープで、逆境をバネにしながら、かつ人を動かす力(人をその気にさせる術)を持つ魅力あふれる人たちであった。振り返って自分自身は、一人で戦える「スモールプレーヤー」には程遠いが、まずは自分が輝けるよう、育自に励み、「まちづくりの応援団」に少しでも近づければと思う。

## 研究員レポート

# 衝撃の旅・長野

研究員 橋岡 勝一

内子町町並み保存センター長の岡田文淑さん、町並みウォッチャーの岡崎直司さんら総勢九人で、長野県浪合村のむらづくり仕掛人近藤庸平さんに会いに行きました。

夜東予港からフェリーに乗って翌朝大阪南港に着き、一路車で。まず長野に来て思ったのは、山の緑が四国と違うこと。当然気候も地形も違うから、植わっている木も違いますよね。

浪合村に着いて最初に何ったのが「トンキラ農園」。ここで近藤さんとお会いしました。役場の職員らしからぬTシャツにジーンズ、車は赤いジープという、ワ

イルドな独特のスタイルにビックリ!

「トンキラ農園」は、一五世帯、八・五畝の農地を利用して、四〇〜五〇年前はどこにでもあった原風景、失いかけていた山村の生活と文化を再現し、村のお年寄りと農業体験をしたり、地元で採れた野菜、いまでは珍しい粟や黍などを使った素朴な伝統料理が味わえるところです。

驚いたのは、食事を出していただいたおばあさんたちです。私たちをお客さんというよりも、家族のように接し、自分の暮らしそのままです。料理を説明される時も自分の言葉で話され、その目



トンキラ農園と近藤さんの赤いジープ



浪合学校 小学校の授業風景  
オープンスクールになっていて、私たちもお邪魔しました。

はイキイキしていました。近藤さんが言われた「自分の土俵だから知恵・技術を伝えられるし、生きがいを持ってやってるよ」というのを実感しました。

このあと、子供たちだけでなく、村民全員に開放されている学校「浪合学校」へ。「浪合学校」は保育園、小・中学校がひとつになっている学校ですが、プランナーや設計者、教職員、村民が協議を重ねてできた、学校というよりも斬新な教育方針、建築の文化施設です。各教室がオープンスペースで、走つていい廊下「ハシロウカ」や毎日昼食の時に生徒全員が集まるランチルーム、畳敷きの大集会室「青雲の間」など、いろいろな空間を

持っています。

このような他に例のない学校なので、全国各地からの視察が多く、転入してくる子供もいるそうです。「なんでもない日常の暮らしを見られることで、やる気になり、積極的になる。感動のほとんどは学習と交流で、浪合学校がその中心」と近藤さんは言われます。このことは、「トシキラ農園」のお年寄りにも言えることで、訪れた人から「いいね。こんなところで暮らせて」と、自分の暮らしが外との交流で認められ、誇りを持つことが地域の価値になります。

近藤さんが言われた一番印象に残った言葉は、「地域の住民一人一人平等でなく、それぞれ能力が違う。地域を良くしていくには」とよく言うけど、それは漠然としている。「地域」でなく、「俺」、「この誰か」で考える。生活感がつかめる範囲で」でした。それが「トシキラ農園」のお年寄りだったり、「浪合学校」の生徒、村民ひとりひとりで、近藤さんが言われる「一人称」にスポットライトを当てた地域づくりなんでしょう。

### 三州街道まちづくり人が

#### 飯田に集う

その夜、飯田市の居酒屋「みつびき」

で交流会がありました。その席には、近藤さんはもちろん、飯田市役所の高橋寛治さん、愛知県足助町観光協会の小沢庄一さんという三州街道（名古屋〜長野県塩尻）沿いのまちづくり人、東北芸術工科大学の水島孝治教授、そして岡田さんとそうそうたる方たちのお顔があります。これにはもう恐縮しました。

高橋さんからご自身がグループで研究されている柳田国男民俗学や現在取り組まれている飯田市のTMOによる中心市街地活性化などのお話を聴かせていただきました。目の前の酒も食事も手につけずに、まさに民俗学者のようなお話に引き込まれていました。半分も理解できていないとは思いますが、高橋さんのお話をお聴きして、地域づくりは、地域を学び、夢を持って、たとえ十年、二十年かかっても気長にやって、チャンスを待つことが大切なんだと感じました。

残念ながら、小沢さんと水島さんの地域づくり哲学はお聴きすることはできませんでしたが、みなさんとお会いできただけでも贅沢な時間でした。

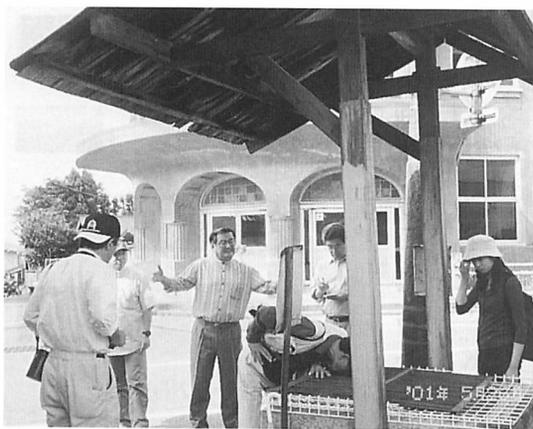
\* \* \*

近藤さんは一年に愛車の赤いジープで三万km、バイクで一万五千km走り、高橋

さんも毎年「まちづくりのキーマンを訪ねる旅」に出られ、昨年は水島教授と山陰に行かれたとのことでした。

旅には新しい出会い、発見があります。私にとっても、自分を高める衝撃の旅になりました。そして、自分のまちをよく知ること、具体的な目的を持つこと、実行すること、夢を持ち続けることの大切さが分かりました。近藤さんにしても高橋さんにしても、それを実践されています。

とにかく、何か始めなければ何も起こらないことを思い知らされました。



翌朝、高橋さんに柳田国男記念館や飯田市美術博物館などを案内していただきました。



もありました。まず最初に考えたのは、「島に今何が必要なのか」でした。①「レンタサイクル用の自転車の増台」、②「レンタサイクルの貸し出し場所の増設」、③「サイクリングが楽しくなるマップ」、④「観光案内所の設置」、⑤「島の人も観光客も楽しめる吉海オリジナルイベント」。

①は二〇〇〇年春、大幅に増えました。②は予算の関係で却下。③は途中まで作りましたが完成していません。(責任は私にあります。)④は二〇〇〇年四月に設置され二〇〇一年三月にくなりました。⑤は結果としてKKPの仕事の九〇%以上を占めるようになり、関ったのは「春のバラ祭り」、「夏休みのオリエンテーリングスタンプラリー」、今治市との共同企画「来島海峡大橋スタンプラリー吉海側イベント」、「秋のバラ祭り」、その間に却下されたさまざまな企画もあり、



吉海町役場企画総務課永井真紀担当  
よさこい鳴子踊りVS吉海小唄

大忙しの日々でした。しかし役場内で認められたプロジェクトにもエクトにもかわからず状況的には厳しく、中

傷あり根も葉もないウワサありで、次第に会議の出席率も落ちていきました。この春にはリーダーが異動となり、解散の危機を迎えました。私なんか本当に「もうイイや!やめちゃえ」って半分ふて腐れてましたものネ。がしかし、今まで頑張ってきた良かったと言いましようか、若いってすばらしいと言いましようか、確実に若い子達は育っていたのでした。誰に誉められることなく、山口には罵倒され、「町づくりはボランティアだ!」と教え込まれ(だって本当にそんな状況ですよ)、しまなみ海道観光客激減の暗い話に押しつぶされそうになり、冬を迎え、走り回る春を迎え、やっぱり誰にも誉められず、それでも彼らは「続けさせて下さい。」と言ってくれました。しかも一冬越してなんだか大きくなってしまつて、最近では「まあ、やっときましよう。」と

## 「ローズ館」奮闘記

～企画観光プロジェクト編～

(有)伊予大島  
ローズ館  
館長



か「段度つておきましたから。」と言われ、寂しいとさえ思ふ日々。

この春、「バラ祭り」で初めて住民参画型イベント(の第一歩)の形を取り入れてみました。成果には大小有りましたが、失敗もしましたが、来年に向けてつなげていける何かはみんな掴んだはずです。KKPのお話はいっぱいありますがページがなくなつてしまいました。番外編があつたらまたその時お話ししたいと思います。

小見出しは「企画書は気合でとおせ!」「お金は使うな、時間は使え!」「出来ない理由を探すな!」「次の世代につなげて行こう!」「イベントは拾って歩こう!」「無理矢理交流から始めよう!」「テレビもラジオも新聞も大切なお友達」てな感じはどうでしょう?とりあえずこの連載は終了です。皆様お元気です!! またお会いいたしましよう!!



KKP元リーダー池田道保担当  
「大海鮮七輪焼き」



吉海郵便局長担当「絵手紙コンテスト」  
～バラ祭りよしみ2001春～

風おこしのちかい

## 地方の自立をめざして

えひめ地域づくり研究会議運営委員

久万町 浅井一郎治



### 一、原点をたずねる

えひめ地域づくり研究会議は、一九八七年（昭和六二年）に発足し、今年で十四年目を迎えています。私は途中参加の会員であり、今年運営委員をおおせつかったこともあって、発足の動機などをたずねてみました。

当時の新しい潮流として、全国の自治体職員、市民、研究者二千人が参加する「草の根自治体学会」が、一九八六年に横浜で誕生しています。その翌年、愛媛でも、まちづくり総合センターと有志の世話人の肝煎りで、二百五十人の賛同を得て、「えひめ地域づくり研究会議」が発足しています。発足の背景には、新しい潮流の中にあつてまちづくりの活動に関心を持ち、自らが行動する人たちが増えているながら、個々の市町村の間には、情報の交流システムがなく、「いま、どこで、

誰が、何をしているのか。」を求め合う声が大きくなったことがあげられます。

さて、発足から今日までに、研究会議が果たしてきた役割には大きいものがあると思います。地方分権という新しい時代の要請もあり、かつまた、組織と活動のリフレッシュを図る意味から、次の二点の検討を提言したいと思います。

その一つは、この際地域づくりに関心を持っておられる人々の会員参加を広く進めてはどうかということです。特に、農山漁村を多く有する県下の状況を考えると、それらの地域現場での会員増強、あるいは女性会員の更なる増加も強く望まれます。

二つ目は、経験豊富な「まちづくりOB」の役割の場の提供、全国組織への研修参加、近県グループとの交流などが考えられます。

### 二、地域と向き合う

それぞれの地域には、人々の生活と生産などにかかわる多様な課題が存在すると思います。その課題解決に向けて、住民も行政も終わることのない営みを続けています。

ところで、地域づくりに法則性はあるのか、あるとすればそれは何かを考えて

## 風おこしのちかい

えひめを愛し それぞれのまち  
むらに生きる我ら同志は、まち  
むらのために新しい未来を自  
らの力で拓くべく、心に  
希望の灯をかかけ、学びあい  
結びあひながら、よりよい明日  
に向って、地域づくりの風  
おこしとなることをちかう、

1987. 11. 14  
(内子座にて)

みました。結局のところ、それは主として産業分野にかかわりますが「地域の特性の重視と、その政策実現」ではないかと自答しています。それぞれの地域には、自然・風土・歴史などによって、長年にわたって積み上げられてきた独自の「特性」があると思います。特性の把握と、それを活かした発展策が、地域づくりの根本的な考え方の一つのように考えます。特性を活かした地域づくりを進めているところは、世の中の変遷にかかわらずなく歩み続けるであろうし、そこに住む人々も、特性をなりわい（生業）として、時には苦しいこともあるけれども、誇りと自信を持って地域に生きることができると思います。

過疎地域は、高齢化と少子化を先取りした社会が進んでいます。数は少なくとも次代を担う若者が育つことこそ、最も重要な地域課題であると思います。そのためにも、特性を徹底的に活かした地域づくりが肝要かと考えます。

### 三、地方分権に新しい夢を

最近、市町村合併という施策もあって地方分権に対する関心が以前に比べると高まりをみせています。「地方分権は、”まち”を、そこに住む人々にとって価値のあるものにするための改革であり、これを成し遂げるためには、さまざまにまちづくり主体との協働が欠かせない。」と考えられています。

更に注目すべきは、今回、政府の経済財政諮問会議が「骨太」の方針案として、地方のあるべき基本理念を、これまでの国土の「均衡ある発展」から「個性ある地方の発展」に転換したことです。これらことから、今後の地域づくりは従前とは異質ともいえる展開が予想されます。自治体も、今まで以上に政策形成能力と実行力が厳しく問われている時代を迎えていると考えられます。同時に私たち住民も、地域の必要性に根ざした政策提言と参画、協働への主体的参加などにより質の高い住民自治活動が重要になると考えます。

この「えひめ地域づくり研究会」も今後、地方分権へ向けた対応がテーマの一つになると思われます。



◀ 蚕種製造工場は現役  
ホラ、繭の山が…。

まずこちらから。保内町の「旧日進館（現愛媛蚕種）」（写真①）。明治十三年に創業された養蚕業華やかなりし頃の大建造物、しかも未だ現役、四国で唯一の蚕種製造工場である。蚕種とは、蚕の卵のことで、時代の花形であった養蚕の最も重要な部分である。（写真②）最盛期である大正期には全国の蚕種製造家番付表で

今回のウォッチングは、キングダイカインについて。これは、胃酸でも解散でもありません、近代化遺産。つまり、我々の住む日本という国が、幕末期にやっとな鎖国を解かれ、以来、外国を意識しつつ近代国家への道をひた走ってきた過程で生まれた数々のモノたち。明治期に大々的に進められた殖産興業の道。澎湃として湧き起るあまたの産業、鉄道や橋梁などの交通整備、そして治水と電気事業を目的としたダム建設などなど。昭和二十年を一区切りとして、それら近代化の一翼を担ったものを文化遺産として総称したもの、それが今、全国的に注目を浴びている「近代化遺産」である。

勿論わが愛媛にも全国レベルで誇れるものがいくつも存在する。別子銅山などはその筆頭であるが、ここでは一般的にまだまだ知名度の低いいくつかを紹介しよう。

開協の位置、第五位にある。因みに第六位は、宇和にあった伊豫蚕業。当時の愛媛は全国有数の養蚕県だった。建物としては、トラス構造の木造三階建て、緩い傾斜地に沿って奥へ奥へと続き、レンガの防火壁まであるというスケール感。第一級の文化財だ。ただし、非公開なので、見学は事前許可が必要。

次の内之浦公会堂（写真③）も保内町。昭和十二年に地元成功者の寄付によって建てられた。入り口ポー

ちの上に、葉つ



# “MY TOWN” うおっちゃんく

## 歩キ目デス & 足ラテス

第16弾

「近代化遺産ウォッチング」



岡崎 直司



ばのような飾りが一枚。遠くギリシャ建築の定番デザインであるアカンサスの葉を、洗い出しという左官技法であしらっている。木造寄棟二階建てであるが、いわゆる擬洋風建築というタイプで、恐らく内部の屋根構造も木造トラスではないかとニラんでいる。そして何より、この建物で特筆すべきは、太平洋戦争の生き証人であるということ。つまり、一階及び二階天井部分には何箇所にも穴が開き、それらは全てアメリカ軍による機銃掃射の跡なのだ。その時の弾までが残されている。半世紀と少し前、日常としての戦争がそこにはあった。

さて、戦争といえば、これを忘れてはいけない。これまた貴重な知られざる戦時遺産。現役最古のバスキュール式開閉橋として有名な、昭和十年築の長浜大橋である。これまた五十年前前にバリバリやられている。開閉橋の説明以外どこにもそのことは書かれていないので、気付かずに帰る見学者も多い。でも、左岸上流側や中央下流側など、写真のような傷跡がアチコチに今も残り、当時のまじさを物語っている。(写真④) その時、この橋を渡っていたらひとたまりも無い。これは第一級の土木遺産であることは勿論だが、内之浦公会堂と共に、戦争の愚

かさを伝える大切なモニユメントでもあるのだ。

長浜にはもう一つ、大事な近代化遺産がある。木造二階建て、昭和十一年築の長浜町役場である。(写真⑤) こうした官公庁の建物で、戦前期のものは確かに貴重になった。ただし、役場の本庁舎でなくとも、出先の支所や公会堂などは、県下全域でみるとまだ残っている。

公的な建築と言えば、旧松山高等学校講堂がこのほどリニューアルされ面目を一新した。(写真⑥) かつて章光堂と呼ばれた旧制高校の建物、卒業生にとっては青春の思い出が一杯詰まったメモリアル



建築だ。前述の紹介物件と同じく、これも現役

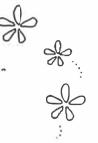
で使われ頑張っている。それが愛大付属中学校という子供たちの教育環境としての活用なので、余計嬉しい。

次に、重信町にある「除(よけ)の堰堤」。(写真⑦) 無骨さが逆に美しい石積み



もう一つだけ。松山市今出にある「鍵谷カナ頌功堂」。(写真⑧) 設計者は、県庁や萬翠荘を手がけたかの木子七郎。カナ女は幕末期の伊予絣の創始者である。彼女の存在がどれほどこの地の経済を潤し、生活を支えたことか。見事な産業遺産である。

以上、いくつかの県内の近代化遺産を見てきた。これらは全て、現在国の有形文化財に登録されている。六月現在の時点で十五件(十八棟)が選定されているが、しかし全国レベルではまだ多い方ではない。もっと光が当たることを期待しよう。

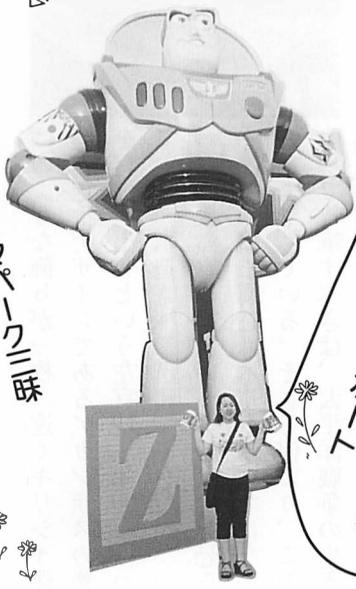


USJもう行きました？私、フロリダまで行っちゃいました♪しかも、WDW（ウォルト・ディズニー・ワールド）とUS（ユニバーサル・スタジオ）のダブル。WDWには、4つのテーマパークがあります。東京にも西海岸にもないサファリをテーマにしたAK（アニマルキングダム）。このキャラクターがサファリの格好をしていてかわいいんです!!

AKが一番楽しかったのは『DINOSAUR』映画見ました？私見てないんですけど、恐竜達が迫力満点に襲ってくるわ乗物はがんが揺れるわで、恐いし、面白いし、もう最高！AKはあんまり『ディズニー』って感じじゃないんだけど、

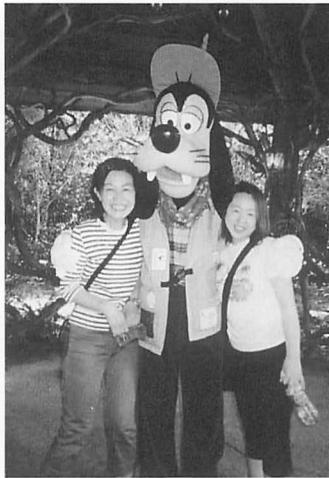


テーマパーク三昧



だからこそ逆にお勧めです。

そしてUS。これも2つのテーマパークがあります。USでは乗ろうって決めた物のうち3つが故障しました。後で2つは復活しましたけどね。「故障です!!」のアナウンスが流れようもんなら、他の人達と一緒に「ブーブー」とブーイングを残して去ってやりました♪もちろん直った時は拍手です。楽しみにして



サファリルックのゲーフィーとしょうびいと私

たスパイダーマンは後で復活したので乗りましたが、これがまた最高で…。3Dのメガネをかけて乗る乗り物なんです。もう目の前に迫力満点に現れるんで、『うええっつ、やられるうう』とばかりにのけぞるわ、目をつぶってしまうわ叫ぶわで、もうドキドキもんです。WDWとUS。両方とも憎いくらいさすがって感じでしたね。でも、キャラが

かわいいのはやっぱりWDW。乗り物はUS。

絶叫系も多いし大人の遊園地って感じでしょ。うか。なん

といっても、両方とも日本みたいにあほみたく並ばなくていいので十分楽しめましね♪

それにしてもフロリダは暑かった!!まぶしすぎて目が開けられないんですよ。だからずぶ濡れにされても、すぐ乾くんですけどね。ほんと半端じゃなく濡れます。しかも誰もポンチョなんか着てないし。濡れても皆笑ってるし。でも、全然許せちゃうんですよね。それくらい楽しいんです!!

あ、この興奮伝わります？



ダイナソーの入り口



パークの中心にそびえたつシンボルの木。よく見ると動物がたくさんいます。



まちセンからのお知らせ

## ☆地域課題研究サロン開催

# テーマ『市町村合併に揺らぐ農山村を考える』

近頃、日本の農山村は、市町村合併問題が震源地となって、浮き足立ち混迷しているように見受けられますが、その原因は、財政問題や行政効率率は議論されるものの、今後の地域社会のあり方について殆ど議論されていないことにあると思います。

そこで、合併問題という視点から、昨年に引き続き、熊本大学徳野教授を迎え、地域やコミュニティを再生するため、今何をしなければならないか、参加者全員で討論する研究サロンを開催します。

■と き：平成13年7月12日(木) 13:30~17:00

■と ころ：にぎたつ会館(松山市道後姫塚)

■プログラム：○基調講演 徳野 貞雄 (熊本大学文学部教授)

○サロントーキング

(基調講演を聞いた感想や質問、日頃合併について地域で思っていること等、全員で討論。)

話題提供者 井村雄三郎 (関前村)

田中 俊二 (一本松町)

※ 研究サロン終了後、講師を交えての交流会を開催する予定。

■問い合わせ・申し込み まちセン ☎ (089) 932-7750 (担当：森田、山下)



## ☆センターからの発刊物

みなさんの地域づくりのために、少しでもお役に立てればと思っています。ご希望の方は、送料実費にて、おわけいたします。ぜひ、ご一読を！

### ●『地域づくりのススメ 2001』

当センターで、平成10年に発刊した地域づくり活動ハンドブック『地域づくりのススメ』の第2弾。今回は、平成12年度に愛媛県から委託を受けて実施した「地域づくりリーダー育成研修会」での講演や討論、「地域づくり活動者研修交流会」での話題を中心に、「行ってみたい地域づくり先進地」、「地域づくりの話聞いてみたい人々」等を収録。B5版



### ●『えひめの地域づくりグループハンドブック』

愛媛県下の地域づくり団体相互の情報交換や活動の一助となるよう、県下70市町村の189団体を紹介。自分達の住む場所を、自分達の手でよくしようと頑張っているグループのこれまでの経緯、現在の活動状況、これからの問題点等を掲載。B6版



## BOOK INFORMATION

### ●変わる商店街

中沢孝夫 著

岩波新書 700円(税別)

まちづくり会社の設立など、全国各地でさまざまな商店街活性化が模索されている。「明らかに新しいうねりが始まった。」という筆者が、まちに賑わいを取り戻そうと市民の手でまちづくりに取り組んでいるところから商店街復活の方向を探る。



### ●人間工学から人間幸学へ

人間幸学入門

和田芳治 著

「過疎を逆手にとる会」の家元の筆者が遺言代わり(?)に57年間学び続けたものの集大成。胃の手術から復活。本人曰く「これくらいの本でいいのなら、私も書くと思っていただくための本」。ご希望の方は、当センターまで。

A4版



お知らせ (財団法人 愛媛県市町村振興協会)

市町村振興 (サマージャンボ) 宝くじが1枚300円で発売されます。

『今年のサマージャンボ宝くじは、1等・前後賞合わせて3億円  
2等だって1億円!!』

1等 2億円×44本 前後賞各 5,000万円 2等 1億円×132本

この宝くじの収益金は市町村の明るく住み良い街づくりに使われます。



2001年市町村振興宝くじ  
サマージャンボ  
**3億円**  
1等・前後賞合わせて3億円(1等2億円・前後賞各5,000万円)

**7/16日発売**  
発売期間 7/16日~8/3日  
抽せん日 8/14日

2等だって  
**1億円!**

今号の特集テーマは少し漠然としてしまっただけかもしれませんが、寄稿して戴いたみなさんに編集人の未熟さをフォローしていただき、今一番大切なことの確認ができたことと少し満足しています。

もう物質的な欲望に振り回されることに終止符を打たなければなりません。世の中金・金・金という時代ではないと確信しました。「本当の豊かさ」の意味をみんなと本気で考える時です。アングルに登場していただいた古谷さんの「足るを知る」という言葉をかみめています。

(森田)

\*\*\*\*\*  
内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

〒790-0003

松山市三番町四丁目十番地一

愛媛県三番町ビル二階

(財)えひめ地域政策研究センター

まちづくり活動部門

(まちづくりセンターえひめ)

TEL089 (932) 7750

FAX089 (932) 7760

発行/平成十三年七月五日

(財)えひめ地域政策

研究センター

印刷/三創印刷株式会社

☆<http://www.netwave.or.jp/~machicen/>

☆E-mail:machicen@mail.netwave.or.jp

本誌は、(財)愛媛県市町村振興協会の委託を受けて発行しています。